

2024年6月号

文化財再発見コーナー

たかおか

おん こ ち しん
温 故 知 新

よしのぶ じ い しんりょう
将軍慶喜の侍医／坪井 信良 (1823～1904)

信良は幕末・明治期に活躍した^{らんぽう い}蘭方医・蘭学者です。信良は、高岡^{とぎやまち}利屋町の町医者・8代佐渡^{さうじゅん}養順の二男として生まれました。幼名は末^{すえ}三郎、字は良^{あだな}益^{りょうえき}です。1840年、京都の蘭方医小石^{せいし}元瑞^{げんずい}に、のち江戸の蘭方医坪井^{しんどう}信道に医学を学び、1844年、信道の養子となります。さらに大坂で緒方^{おがたこうあん}洪庵に医学・蘭学を、広瀬^{ひろせ}旭^{あさ}荘には漢籍^{かんせき}を学ぶなど見識を深めました。1853年以降、福井藩主松平^{しょうへい}春嶽の侍医兼藩校教師になります。

1858年、天然痘対策の医療機関「お玉が池^{しゅとつ}種痘^{じゅどう}所」(東大医学部の前身)設立に参画。同年、幕府の洋学研究機関である蕃書^{ばんしよ}調所^{しらべしよ}の教授補になります。1864年に将軍とその家族を診る奥医師を経て、

1866年には最後の将軍徳川慶喜の侍医になります。

1868年1月、鳥羽伏見の敗戦後、慶喜は僅かな人数を連れて大坂から江戸へ戻りますが、信良も同行しました。維新後、慶喜に従い駿府に移り、静岡病院

^{かしらなみ}頭並^{かしらなみ}となります。1873年日本で2番目の医学雑誌『医事雑誌』を創刊。翌年、東京府病院総取締役に就任します(～1876年)。退隠後も著述を続け『カンスタット内科書』48巻など翻訳書も多数出版しました。1846年から77年までの間、高岡の兄・9代養順へ送った書簡約200通には、慶喜の近くで体験した幕末維新期の事件や出来事が記されており、同時代を知る貴重な資料となっています。(仁ヶ竹主幹)



坪井信良肖像

問合先 博物館 ☎20-1572